

平成29年度 職員提案 提案数17件 採用数7件

| 提案名 | 提案内容 | 現状・問題点 | 効果 |
|--------------------------|--|---|--|
| 関連窓口における障害者支援助成等制度一覧表の配布 | 身体障害者手帳等所有者が利用できる障害者支援助成等制度の一覧表を、各種制度を設けている関連部署にて、各担当窓口申請に来たお客様に対し配布し、制度の周知を図る。 | 障害者支援助成等制度については、障がい者福祉課のみならず、各担当部署で申請を行うことで助成を受けることができる制度があるが、お客様の中には長年該当要件を満たしていたにも関わらず、制度について知らなかったために、これまで助成を受けられなかった方がいた。また、申請に来たお客様に対し、他にも利用できる可能性のある助成等制度について紹介したところ、他の制度についても知らなかったケースがあった。このように、制度について知らなかったためにお客様が不利益を被る場合がある。 | 障がい者福祉課で行っている各種制度の説明に加え、広報等をみて各担当部署に来て申請に来たお客様に対し、希望する場合には障害者支援助成等制度一覧表（障がい者福祉課が配布しているパンフレットの各種制度一覧を抜き出した簡易的なものでもよい）を配布することで、制度の周知のさらなる充実が期待できる。 |
| ベビーチェアの設置 | ・乳幼児を伴って来庁してくる保護者が、トイレを安全に利用するためにベビーチェアを設置する。 ・カウンターで記載する際に、ベビーチェアを利用できるよう可動式の物を配置する。（カウンターの場合、乳幼児を伴わない申請等でふさがりことも多くあるため、可動式とし、必要に応じて母親の隣に設置できるものが好ましい。） | ・現在、乳幼児を伴って来庁する市民がトイレに行く際に、乳幼児を片手で抱えていなければならない、大変不便をしている。 ・カウンターでの申請等の際、乳幼児を伴っている場合は、市の職員が乳幼児を抱えている間に書類の記載をお願いしているが、見知らぬ人となるためぐずる乳幼児も多く、保護者が片手で乳幼児を抱えながら、申請書に記入をしている場合が多い。 | ・一階の各トイレ1ヶ所およびカウンターにベビーチェアを設置することにより、乳幼児の安全を確保し、保護者の負担を軽減できる。 |
| 健康センターの洋式トイレに温式便座を導入する | 妊娠されている方や小さなお子さん連れの親御さん、ご高齢の方など、休日・平日夜間診療も加えると年間を通じて大変多くの方が来所する健康センターの既存洋式トイレに温式便座を設置し、冬季のトイレ利用者の身体への負担を緩和する。設置個所は、利用頻度の高い1・2階の多目的トイレおよび1・2階女性用の既存洋式トイレを提案するが、費用対効果を考慮し、特に利用の多い1階に設置を集約し、設置をアナウンスし誘導するなど合わせて提案する。また、夏季は電源を切るなど節電にも取り組む。 | 健康センターは、健康診断や予防接種、母子手帳の発行など、妊娠されている方や小さなお子さん連れの親御さん、ご高齢の方など、とても多くの方が年間を通じて来所されている。そのような状況でトイレの利用は必然的に多くなり、特に妊娠中期～後期のお腹が大きい妊婦さんや小さなお子さんなど洋式トイレしか利用できない方も増えている。しかし、既存の洋式トイレは、温式便座ではないため、冬場のトイレ利用では便座がかなり冷たい。実際、妊娠中に健康センターに来所した方からもトイレの便座が冷たくて、利用しづらいという声も聴いている。自身も妊娠中の経験として、健康センターの洋式便座が冷たくお腹に負担がかかった。 | 年間、検診等での来所者数約2万人、休日・平日夜間診療（歯科診療含む）で7千人もの方々に利用されている健康センターは、幅広い年齢や身体状況の方が集まる施設である。公共施設においても導入が進んでいる温式便座を設置することにより、施設面で身体的負担を取り除き、安心してトイレを利用していただくことができる。これにより、利用者にやさしい健康センターづくりができ、市民サービスの向上に直結する。 |
| ドイツの伝統行事「クリスマスマーケット」の開催 | ドイツの冬の伝統行事「クリスマスマーケット」を開催し、東京2020オリンピック・パラリンピックに向けて、ドイツのホストタウンとして大会気運の醸成を図る。対象者は主に市民一般で、クリスマスイベントに関心が高い若い世代をはじめ、子供と一緒にイベントを楽しめる子育て世代、また高齢者についても、オクトーバーフェストでの来場者が多くみられたため、幅広い世代を対象としたい。また、公式ツイッター等のSNSで周知をすることで、市外からの来場者も増やしたい。 | 現状は、青梅市では、昨年6月にドイツ連邦共和国のホストタウンとして登録され、文化面・スポーツ面などにおける交流を深めるため、今年10月に開催されたオクトーバーフェストやドイツウィークなど様々な取組が行われる。クリスマスマーケットを行う方法については、ドイツのクリスマスマーケットではクリスマスツリーのオーナメントの販売があるが、日本ではクリスマスツリーの飾りつけをする文化はさほど根付いていないため、屋台ではグリューワインやドイツビール、ソーセージやシュトレン等の飲食物やクルミ割り人形等の工芸品を販売したい。屋台の屋根などにクリスマスらしい飾りつけを行い、夜はイルミネーションとして魅力的な雰囲気をつくり、広場の中心にはクリスマスピラミッドやクリスマスタワーもしくはクリスマスツリーを設置してクリスマスマーケットのシンボルとしたい。開催期間はドイツではクリスマス前のアドヴェント期間で4週間開催されるが、人件費やその他のコスト、開催場所の確保の問題もあるため、4週間より短く短期集中で開催したい。 | ・ドイツのホストタウンとして様々なドイツ文化を発信し、2020年東京オリンピックの大会気運の醸成を図る。 ・公式ツイッター等のSNSで新たなイベントとして周知をすることで、青梅市の知名度の向上を狙う。 ・市内市外からの入場者や販売の売り上げ、新たな需要により経済効果を発生させる。 |
| パパ・ママが使いやすい「ベビールーム」づくり | 市役所本庁舎1階東側にある授乳室が利用者にとって使い易いものとなるよう、室内環境の改善を図る。具体的には、授乳室内の授乳スペースとおむつ替えスペースとを、新たにレールカーテンを設置して区分けすることにより、限られた空間の中で授乳者のプライバシーを確保しつつ、同時におむつ替え利用者にも対応することができる。また、女性のみ利用に限定されてしまう「授乳室」という名称を、例えば「ベビールーム」に改称することで、男性にもおむつ替えや調乳の際に利用しやすい空間へと改善することができる。入り口前のパーテーションの配置の見直しや入口のイメージを明るくすることで、ママもパパも気軽に安心して利用できる分かりやすい案内を目指す。（本提案に当たっては、育児中の職員（育児休暇から復帰して1～3年程度の女性職員を中心に、未就学児を育てている男性職員）が自主的な研究グループとして集まり、子どもを持つ来庁者にとって既存施設の機能が十分に発揮（利用）されているか、当事者目線で模擬利用するなど、昼休みの時間を使ってランチミーティングを重ね、提案としてまとめた。） | 授乳室は名称のとおり、女性が授乳するための空間となってしまうっており、調乳のための給湯設備やおむつ替えのためのベビーベッドが設置され男性でも利用することが可能であるにもかかわらず、利用しづらい状態にある。男性が授乳室以外でおむつ替えをする場合、授乳室とは逆側の正面玄関近くの多目的トイレのおむつ替え台を利用することになるが、対象者が多い子育て推進課窓口からは遠く、かつ、多目的トイレでおむつ替えができること自体認知されていない可能性が高い。現在、授乳室は、外から見えない様、外側にパーテーションが設置され出入りは誰でもできるようになっている。そのため、授乳者は、いつ男性が入ってくるか分からず、かつ、複数人で授乳スペースを共有する作りとなっており、プライバシーの確保が十分にできていない。さらに、外側のパーテーションがベビーカーで入室する際の妨げとなる上、「授乳室」の表示を分かりにくくしている。授乳室自体に民間施設のような明るい雰囲気がなく、無機質で、温かみがない。 | 育児は男性の参画が当たり前という社会状況にあり、施設機能の改善を図ることで、社会のニーズに応えるだけでなく、子育て世代の目線に合わせ、子育て世代にやさしい環境づくりができる。また、施設機能に加えて既存施設の印象を変えることで、機能・印象ともに使いやすい施設へと変化させることができる。 |
| 企業広告を活用した庁舎案内板の更新について | 来庁者向けに各所に設置している庁舎案内板は、組織改正やそれに伴う事務室レイアウト変更により、表示内容を更新する必要があることから、企業広告を活用し更新に係る負担を無くそうとするもの。市役所は、転出入や納税などによる諸手続きのため、年間を通じて大変多くの方が訪れている。そこで、庁舎1階の青梅市全図やデジタルサイネージの設置、くらしのガイドや子育て支援ガイドにおける企業広告掲出の仕組みを参考に、多くの方の目に留まる庁舎1階の案内版横のスペースおよび土日や時間外の来庁者の目にも留まるエレベータースペースを活かし、広告代理店が広告を掲出する。これにより、案内板の更新、広告掲出媒体の設置・更新について広告代理店が継続的に負担する仕組みができる。 | 所管課によれば案内板の更新には多額の費用がかかるため、組織改正の際、軽微なものはテープ等にて修正を行い、大きな組織改正のタイミングに合わせてまとめて更新をしているとのこと。企業広告の活用については、くらしのガイドや子育て支援ガイドの作成、庁舎1階の青梅市全図やデジタルサイネージの設置に当たり、すでに広告代理店と連携して取り組んでおり、作成や設置に係る費用、更新費用の負担はない。案内板やエレベーターの周辺にはスペースがあり、案内板を見る方だけでなく、来庁された方が目に留まりやすい（広告効果が高い）場所がある。 | 庁舎案内板は、多くの方の目に留まるものであるため、テープ等での修正は見栄えの悪さに問題がある。一方で、目に留まりやすい事は広告効果が高いとも言える。自前での対応（修正作業、更新に係る手続き、多額の経費の確保など）に係る市の負担は大きいですが、案内板を安定的に更新できる仕組みとすることで、見栄えを良好にするとともに、負担を大きく軽減することができる。 |

平成29年度 職員提案 提案数17件 採用数7件

| 提案名 | 提案内容 | 現状・問題点 | 効果 |
|--|---|--|--|
| <p>第80回奥多摩溪谷駅伝大会において、</p> <p>1. 有名な実業団、大学の招待</p> <p>2. フォトログイニングを併催し、青梅市の魅力を知ってもらう</p> <p>3. 制限時間を引き下げる</p> <p>4. ファンランの部を開催する</p> <p>5. ファミリー駅伝の部、親子ペアランの部を開催する</p> | <p>1. 奥多摩溪谷駅伝大会を多くの人に喜んでいただくためには、沿道の観客を増やすことが必要と考える。 そこで、年始の実業団駅伝、箱根駅伝に出場し、上位に入賞している実業団、大学を招待することで、沿道には、有名な実業団、大学を見たいと思う観客を増やす。</p> <p>2. 奥多摩溪谷駅伝大会を盛り上げるには、沿道の観客を増やすことが必要と考える。 そこで、奥多摩溪谷駅伝大会に絡めたフォトログイニングを併催し、観客を増やすと同時に、青梅市の魅力を知ってもらうきっかけとする。 チェックポイントは、奥多摩溪谷駅伝のコース上にある青梅市ならではの場所（御嶽駅など）とし、その場所に駅伝参加選手が映り込むような写真を撮影する。 フォトログイニングのルールでは、基本的には本人が映り込むような写真を撮ることが多いが、それでは、競技に支障をきたすので、駅伝参加選手が映り込むような写真を撮ることにする。</p> <p>3. 普段、ランニングを楽しんでいる人も参加できるように制限時間を引き下げる。 制限時間の目安としては1km6分とする。理由は、青梅マラソンの制限時間は30kmで4時間、1km8分のペースである。このペースでは、交通規制の問題も発生することから、ある程度の練習を積んだ人なら走ることが可能なペースを制限時間の目安とする。 現在の制限時間は、一般・大学・高校の部で6区間44.8kmを3時間、女子の部で3区間11.1kmを1時間であるが、記念大会となる今回に限り、一般・大学・高校の部で6区間44.8kmを4時間30分、女子の部で3区間11.1kmを1時間10分とする。合わせて、一般・大学・高校の部の3区以降に設けられている関門時間を引き下げる。</p> <p>4. ファンランの部を開催する。 ファンランの部の区間及び距離は少なくし、スタート時間及び若干の交通規制の調整でゴールできるように開催する。区間及び距離については、例えば、一般・大学・高校の部の6区間44.8kmのうち、古里中継所朝日運輸前を折り返しとした4区間31.6kmを使用する。 1区：青梅市役所～二俣尾中継所農協前（7.4km）2区：二俣尾中継所農協前～古里中継所朝日運輸前（8.4km）3区：古里中継所朝日運輸前～二俣尾中継所農協前（8.4km）4区：二俣尾中継所農協前～青梅市役所（7.4km）</p> <p>5. 市役所の周回（1周約600m）を利用したファミリー駅伝の部、親子ペアランの部を開催する。 競技時間は、一般、大学、高校の部及び女子の部に影響が出ないように、10時10分頃～11時40分頃までの開催とする。 ■ファミリー駅伝の部 1周を1区間とし、2区間（子供区間、大人区間）で競う。 参加資格は、小学校1年生～小学校3年生およびその家族とする。 ■親子ペアランの部 1周を親子で走って競う。 参加資格は、未就学児およびその家族とする。</p> | <p>1および2. 奥多摩溪谷駅伝大会は、沿道の観客は少なく、出場者のみで盛り上がっている。</p> <p>◆フォトログイニングとは 地図をもとに、時間内にチェックポイントを回り、得点を集めるスポーツ。チームごとに作戦を立て、チェックポイントでは見本と同じ写真を撮影する。チェックポイントに設定された数字がそのまま得点となり、より合計点の高いチームが上位となる。</p> <p>3および4. 第79回大会の一般・大学・高校の部を例にすると、1区（7.4km）で一番遅い選手でも1kmを5分台前半のタイムである。このペースで走るには相当の練習が必要であるため、普段からランニングを楽しんでいる人が駅伝に参加してみたいと思っても、ハードルが高いと感じてしまう。</p> <p>5. 奥多摩溪谷駅伝大会は、伝統ある大会にも関わらず、注目度が低い。</p> | <p>1. 奥多摩溪谷駅伝大会の後に開催される実業団駅伝、箱根駅伝に出場する選手が奥多摩溪谷駅伝大会に出場することで、注目が集まり、奥多摩溪谷駅伝が盛り上がるだけでなく、青梅市の知名度アップにもつながる。</p> <p>2. 各地で開催され参加者が増えているフォトログイニングを併催することで、沿道に観客が増えると同時に、青梅市の魅力を知ってもらうきっかけとなる。</p> <p>3. 制限時間を引き下げ、参加しやすくすることで、参加者が増え、大会が盛り上がるだけでなく、試走等により大会以外で青梅市を訪れていただくことにより、青梅市の魅力を感じてもらうことができる。</p> <p>4. 制限時間を引き下げ、参加しやすくすることで、参加者が増え、大会が盛り上がるだけでなく、試走等により大会以外で青梅市を訪れていただくことにより、青梅市の魅力を感じてもらうことができる。 ファンランの部を開催しても、若干の交通規制の調整で開催できることから、市民、関係部署の理解が得やすい。</p> <p>5. 他市で開催が少ないファミリー駅伝の部、親子ペアランの部を開催することで、青梅市内外から注目が集まり、奥多摩溪谷駅伝大会を通じて、青梅市の魅力を知ってもらうことができる。 青梅マラソンにはジュニアの部があるが小学4年生以上である。小学3年生以下を対象とすることで、青梅マラソンとの差別化を図ることができる。 練習や本番を通じて家族の絆が深まり、子供たちに走る喜びを体験させることができる。</p> |